

東京電力福島第一原子力発電所の事故処理現場を視察してきました。

2011年3月11日、東北太平洋沖海底のプレート境界で、**Mw9.0**の超巨大地震が発生しました。

この地震で、東北太平洋岸を中心に北海道から、関東まで広い範囲にわたって津波が襲来しました。特に青森県沿岸から、茨城県の沿岸にかけての津波被害が大きく、岩手県、宮城県では、壊滅的な被害を受けた市町村も少なくありませんでした。

この大津波は、原子力発電所にも襲いかかりました。

東電福島第一原子力発電所（以下「1F」）では、全電源喪失という非常事態に陥り、核燃料の冷却機能が停止します。やがて、1～3号機内の格納容器内（4号機は、すべての核燃料が、点検のため冷却プールに入っていました）にあった、核燃料はメルトダウンするに至ります。メルトダウンにともない、大量の水素が発生し、まず、1号機、次に3号機で水素爆発が起き、4号機とあわせ建屋上部が吹っ飛びました（2号機は、開閉口が開き水素が外部流出）。そして、大量の放射性物質が飛散しました。

あの事故から6年がたち、2017年3月13日、廃炉作業に取り組んでいる1Fに志帥会（会長：二階幹事長）のメンバーとともに、団長として視察に入らせていただきました。私としては、3年ぶりの視察になります。

敷地内は、ガレキの撤去や、雨水の浸透を抑える法面のコンクリート被覆、放射性物質を含んだ水の多核種除去装置、凍壁工事などかなり整備が進んでおり、4号炉の冷却プールからの核燃料の取り出しもすでに終了していました。

今は、1～3号機内にあるデブリ（メルトダウンした核燃料）の取り出しと廃炉に向けた準備作業がおこなわれています。連日6000人の作業員が活動しています。

まず、格納容器内のどこに、どのようにデブリがあるのか、特定していくことから始めなければなりません。ロボットによる調査も開始されていますが、まだまだ、入り口段階です。デブリの場所もわかっておらず、したがって、どのようにして取り出すかについても、まだ決められる状況ではありません。しかし、必ず、デブリの取り出し、廃炉はやらなければなりません。時間がかかっても、そして、いくら経費がかかろうが（いくらでも経費をかけてもいいという意味ではありません）、安全にデブリを取り出せる手法を開発し、廃炉を実行することは、1F事故処理における国、東電の責任です。

なお、デブリは、格納容器に入っている状態では、冷温停止状態は保たれており、外部に放射性物質がでる可能性は、きわめて低いとされています。

写真1. 免震棟内で



写真2. 構内では、廃炉作業にあたる職員向けの食堂も開設され、調理したての暖かい食事が提供されるようになっていました。



写真3. 志帥会メンバー、準備 OK



写真4. 後ろは1号機で、水素爆発によって散乱したガレキの撤去作業が進行中。冷却プール内には、まだ、使用途中あるいは使用済み核燃料が入っており、ガレキ撤去が終了しだい、取り出しをおこなう予定です。敷地内へは、マスクのみの軽装で入れるようになりました。



写真5. 凍土壁をつくる液体を送り込むパイプライン



写真6. 東電増田氏らと（檜葉町の東電施設前にて）



写真7. 除染後の土などが入った袋



写真8. 震災後まったく人の手の入らない水田は、湿地性の植物で覆われ、少し乾いた農地には柳などの木が繁茂していました。

